

## はじめに

原口剛はらぐち たけし

ここに刊行する『翻訳と連帯——ある寄せ場労働者の「抗日パルチザン参加者たちの回想記」翻訳の軌跡』は、寄せ場の活動家であり日雇い労働者でもある鈴木武による朝鮮人抗日パルチザンの回想記の翻訳を公刊するものである。はじめに、本書がかたちになるまでの経緯を記しておきたい。現在も大阪のドヤ街・釜ヶ崎に住まう鈴木は、長年のあいだ寄せ場の労働——主として建設労働——に携わりながら、釜ヶ崎や東京の山谷、名古屋の笹島など、各地の寄せ場での運動に身を投じてきた。日々、活動と日雇いの仕事に忙殺されるなか、およそ三〇年の長い年月をかけて、かれは『抗日パルチザン参加者たちの回想記』一二巻（朝鮮労働党出版社、以下『回想記』）をすべて翻訳しきった。

本書に収録した日本語訳は、鈴木が二〇一四年に自费制作した『抗日パルチザン参加者たちの回想記特選集』（以下、『特選集』）を土台としている。『特選集』において鈴木は、自身が翻訳した『回想記』のうちいくつかのエピソードをセレクトションして配列し直し、自らの手で印刷したうえで、かれの親しい仲間だけに配っていた。さらに鈴木は、『特選集』およびその他の『回想記』の翻訳成果が公的機関に保存され、将来の研究者によって活用されることを望んでいたが、自费制作物という性格ゆえに、公的機関に所蔵するのは難しかった。編者の原口は、大阪を中心に寄せ場の調査研究をつづけるなかで、二〇二〇年に鈴木と出会い、『特選集』をはじめとする朝鮮語翻訳の成果を保存したいというかれの意思を知った。また、かれのライフヒストリーや翻訳作業の足跡を聞き取っていくなかで、その意思通り、研究者たちがこの成果を十分に活用できるような環

境を整えるべきという思いを強くしていった。そうして、本書の共編者である森田和樹と板垣竜太の協力を得て、同志社コリア研究叢書5として刊行する運びとなった。

以上の経緯から明らかであるように、本書の第一義的な目的とは、鈴木木の翻訳の成果を広く社会に共有し、様々な人びとが閲覧・参照できる環境をつくることである。さらに編者らは、鈴木木のリフヒストリーや、かれが数十年の時間をかけて行つた翻訳作業の痕跡そのものが、歴史性を帯びた貴重な史料であるという認識を持つようになつた。その「痕跡」には、少なくとも三つの意義があると思う。

第一に、鈴木木の営みは、釜ヶ崎に積み重ねられた運動史を捉えなおすための視点を与えてくれる。解説でくわしく述べるように、鈴木木による翻訳行為のはじまりのひとつは、一九七四年に釜ヶ崎の住宅の一室で始められた朝鮮語学習会であつた。寄せ場の運動史にとつてこの年は、七二年に頂点に達した日雇い労働者の闘争が挫折した直後の時期にあたる。「冬の時代」というべきこの時期を、労働者や活動家はどうか生きたのか。その問いは、これまでの寄せ場研究のなかで深く追究されてこなかった。「翻訳」という鈴木木の行為は、運動が衰退する局面のなかで、それでもなお闘争の課題と可能性とを引き受けようとする試みでもある。私たちは、そのような小さな実践のなかでこそ、のちの闘争を準備するような可能性の地平が広げられたことを知らされる。なかでも重要なのは、寄せ場の運動史と朝鮮史とが交差するような場が切り開かれていったことであり、その可能性はいまだ汲みつくされていない。

第二に編者らは、鈴木木の翻訳行為を目の前にして、研究者として感嘆と尊敬の念を抱かざるを得なかつた。過酷な労働のなかで、しかも各地のドヤや飯場を転々とする生活のなか、原著と翻訳ノートを肌身離さず持ち歩き、約三〇年の時間をかけて翻訳と推敲を重ねていった鈴木木の持久力に、多くの人は心を打たれるだろう。鈴木木の営みは、連帯への希望や「学ぶこと」のみずみずしい喜びへと、私たちを導いてくれる。その姿は、「役

に立つ」ことを追い求める近年の大学や学問のありようを、根本から問うものでもある。編者らは、このような在野の研究活動の価値に光を当て、幅広く発信することは、大学人が果たすべき重大な責任であると確信している。きっと私たちのまわりには、鈴木のみみりのような「巷の知」がさまざまに生きられているにちがいない。本書の刊行が、そのような知のありようを再発見する機会になればと願っている。

第三に、鈴木のみみりは、生きられた都市の経験を物語っている。鈴木を朝鮮半島への連帯へと向かわせたものは、なんだろうか。解説で述べるように、その背景にあるのは、幼年期における在日朝鮮人の友だちとの出会いであり、山谷や釜ヶ崎の活動家や労働者との出会いであった。私たちは、鈴木が辿った人生の軌跡のなかに、流動する下層労働者が織りなす出会いの空間を認めることができる。さらに、鈴木のみみりの翻訳行為を支えたのは、鶴橋の書店や朝鮮総連の支援といった、横断的な関係性であった。そこに私たちは、連帯を育む場としての都市を再発見することができるよう。このように、鈴木のみみりの翻訳行為を聞き取り、再構成する作業は、都市を生きる群衆の地理を描き出し、その可能性をみつめることでもあった。

本書を編むにあたって編者らは、四〇年以上前にドヤの一室で鈴木のみみりが書きつづった手書きノートをお預かりした。丹念に書き記された文字のひとつひとつは、国境で分割された地図を乗り越えようとする意思と想像力を、力強く訴えかけている。偶然にも本書の刊行は、関東大震災における朝鮮人虐殺から一〇〇年、寄せ場の活動家・船本洲治が「釜ヶ崎反入管通信」と題するピラを作成してから五〇年の節目にあたる。都市を排外主義が覆い尽くそうとする現在、鈴木のみみりの翻訳行為や、七〇年代・釜ヶ崎の活動家や労働者が向き合った課題は、ますます重くと言わなければならない。本書が、「連帯を育む場」としての都市を取り戻すためのきっかけとなることを願う。

〔注〕

1 鈴木との出会いを語るうえで、故・風間竜次氏の存在が決定的であった。原口は、一九七〇年代から寄せ場の闘争を率いてきた風間竜次らが集った「寄せ場史料調査会」のメンバーとして、釜ヶ崎の闘争を生きた当事者へのインタビューを重ね、各地に散在するビラなどの記録を収集する活動に携わってきた。だが、風間の身体は癌に蝕まれ、二〇二一年二月二二日に帰らぬ人となってしまった。風間は、癌が発見されたあとも入院を繰り返しながら闘病生活をつづけ、その合間に各地を訪問しては記録の作業に最後までエネルギーを注いでいた。二〇二〇年七月、広島のスペース・アビエルトのイベントに参加した帰路、風間は大阪・釜ヶ崎をおとずれ、「あいりん総合センター」のうえに建つ市営住宅の一室のなかで、かつて闘争を共にした仲間たちと、交流のひとつときをもった。その顔ぶれのなかに、鈴木の様があった。こうして原口は、鈴木と初めて出会うことができたのだった。

2 インタビューは計六回に及び（二〇二〇年八月一日・八月二二日・八月二九日・九月二二日・九月一九日・九月二七日）、また追加のインタビューを数回実施した。

3 「釜ヶ崎反入管通信」については解説および付録資料4を参照。

〔付記〕

本書を制作するにあたり、木村桂文社の杉原光太郎氏には組版などの面でお世話になった。川邊雄氏には装丁をお願いし、編者らの意向をくみ取ったうえで素晴らしいデザインをつくっていただいた。また、中島敏氏には、貴重な写真を提供いただいた。記してお礼申し上げる。なお本書は、JSPS科研費「釜ヶ崎史料を基点とした地域情報アーカイブの実践的研究」（基盤研究C、研究課題番号19K02109）および「釜ヶ崎史料アーカイブの実装による都市下層の歴史社会学」（基盤研究B、22H00910）による成果の一部である。また『特選集』以外の訳文の全体については、ウェブサイトに公表する予定である。